

初日オリエンテーション時に集まった受講希望者はおよそ300名に近かった。ちなみに使用された教室の座席数は約250席であった。シラバスに則り概要を説明した後、座席数の許す範囲で特に受講者数の制限をしないことを告げ、受講を希望する者に次の3項目について記述を求めた。

1. 受講希望理由（受講の動機、興味を持ったきっかけなど）
2. この講義に期待すること。
3. 小テストとして：「客観的」という言葉の意味についての説明

これらの意図は、つぎのとおりである。1については、冒頭で述べた本講義の受講動機のほかに、併せて最近の心理学受講者増加の要因を探ろうとしたこと、2として授業者として受講者が本講義に期待している具体的な事項を知ろうとしたこと、3は「客観」という語の概念理解の実態を通して、本授業に集う受講者に「心理学」を「科学」として理解させることの可能性を探ることであった。

本報告では、これらのうち1について12年度収集された資料のみの分析結果を報告する。同様の資料は13年度においても収集されており、授業の成果としての最終試験の結果との関連性についても分析を進めるべきと考えており、大衆化した今日の大学における受講者と授業者の新たな関係の構築に寄与したいとも考えている。

2 調査の方法

〈調査の実施と回収〉調査は、調査項目とその回答記述欄が印刷されたA4用紙を授業初日の授業時間中に配布し回収する方法で実施された。回収された調査用紙は計276人分であった。

〈記述文のデータ化〉受講理由の記述欄に記述されたものを1名分ずつワードプロセッサ（一太郎）にインプットし、さらにその文書を1件ずつデータベース化した。この際1名につき1理由を原則として文中からキーとなる語句や文節を抽出してキーワードとして登録した。

〈キーワードの類型化〉キーワード一覧を作成し、それぞれのキーワードが抽出された原文を確認のた

め随時参照しながら吟味し、暫定的に分類項目を作成することを繰り返した。それらのキーワードを参照しつつ作成された分類項目の最終結果がTable 1に示されたものであり、これを受講希望理由カテゴリーとした。

Table 1 カテゴリー別頻数(%) (%の母数(N)は276)

コード	内 容	頻数 (人数)	%
10	(タイトル) 一般的興味関心	合計 57	20.7%
11	本などで知って	4	1.4%
12	人に聞いて	8	2.9%
13	世間一般の人気	5	1.8%
14	別の「心理学」の講義で関心を持ったので	7	2.5%
15	専攻と異質な分野だから	6	2.2%
19	「心理学」に以前から興味関心があった	27	9.8%
20	(タイトル) 単純な動機による選択	合計 66	23.9%
21	「日常生活の心理学」というタイトルに魅力	44	15.9%
22	シラバスを読んで	12	4.3%
23	一つの学問として	5	1.8%
24	これまでに勉強したことがなかったから	5	1.8%
29	その他の単純動機	0	0.0%
30	(タイトル) 実利的理由	合計 65	23.6%
31	自分自身の人生	15	5.4%
32	自分の目指す専門や職業	45	16.3%
33	人のために役立つと思うから	5	1.8%
39	将来役に立つ	0	0.0%
40	(タイトル) 人の日常行動への一般的関心	合計 38	13.8%
41	人間関係の難しさ	7	2.5%
42	社会現象への関心	1	0.4%
43	他者の行動への関心・理解	24	8.7%
44	人々の影響の仕合	2	0.7%
49	その他人の日常行動への一般的関心	4	1.4%
50	(タイトル) 人間への関心	合計 38	13.8%
51	人間存在への関心	9	3.3%
52	自己の内面探求	19	6.9%
53	人間行動への科学的関心	10	3.6%
59	その他「人間」に関する関心	0	0.0%
60	(タイトル) 特定専門領域への関心	合計 22	8.0%
61	人間関係	4	1.4%
62	集団	3	1.1%
63	異常行動	4	1.4%
64	心理テスト	3	1.1%
65	不登校	1	0.4%
66	いじめ	0	0.0%
67	性格	5	1.8%
68	コミュニケーション	1	0.4%
69	その他の特定専門領域	1	0.4%

3 調査結果

Table 1 の各カテゴリーに付随している数値は、そのカテゴリーに分類されたキーワードの頻度である。

Table 2 大分類カテゴリー別頻数(%) (%の母数(N)は276)

コード	内 容	人数	(%)
20	単純な動機による選択	66	23.9%
30	実利的理由	60	21.7%
10	一般的興味関心	57	20.7%
40	人の日常行動への一般的関心	38	13.8%
50	人間への関心	38	13.8%
60	特定専門領域への関心	22	8.0%

4 調査結果の考察

(1) 単純動機群と目的動機群の存在について

Table 2 は Table 1 のコード 10, 20, 30, 40, 50, 60 すなわち下位カテゴリーを集計した部分（これを大カテゴリーと呼ぶことにする）のみを表にしたものである。これによると、最も頻度が高い大カテゴリーは「20 単純な動機による選択」であることがわかる。この内容は Table 1 からわかるように「21

『日常生活の心理学』というタイトルに魅力を感じて」の者が 66 名中 44 名で 66.7 % を占めており、「22 シラバスを読んで」を加えると 84.8 % になる。シラバスが受講動機に大きく影響していることがわかる。

一方、この数値を 276 名の全受講希望者に占める割合という点からみれば 20.3 % であり、それ程の要因ともとれない面もある。しかしながら、3 位に位置する大カテゴリーである「10 一般的興味関心」の中には「19 『心理学』に以前から興味関心があった」者が 9.8 % を占めている。本来この「10 一般的興味関心」というカテゴリーは本授業を受講するすべての学生にとって受講の前提として存在する共通条件であると考えられる。興味や関心なくしての受講は考えられないからである。そうした点をふまえて「10 一般的興味関心」と「20 単純な動機による選択」をともに単純動機群とし、「30 実利的理由」「40 人の日常行動への一般的関心」「50 人間への関心」「60 特定専門領域への関心」のようにその他のカテゴリーが具体的な目的を持った目的動機群ととらえることができると考えられる。

こうして本調査で対象となった受講生の受講動機は大きく 2 つのタイプに類型化されることになる。まずその 1 つは受講に際して「特に明確な目的意識を持たない群」（単純動機群）であり、他の 1 つは受講に際し「具体的な目的を持つ群」（目的動機群）である。本調査の結果からすれば前者は 44.6 % を占めるのに対し後者は 59.2 % と前者より多い。ここで両者を加えた結果が 100 % を越えるのは、カテゴリーへの振り分けに際し、理由が 2 つ以上あった者がいたためである。

ところで「単純動機群」に対して若干だが「目的動機群」が上回っていることは、大学で講義を担当する授業者にとっては好ましく感じられるところである。しかし果たして楽観は許されるのであろうか。また、はたしてこれが一般的傾向なのか、本授業に集った受講生特有の傾向なのか、また、特に顕著な最近の傾向といえるのか等の疑問については、他の心理学関連の授業との比較や継続的調査資料による検討が必要であらう。

しかしながら、本調査に限った範囲でも、受講生間にはかなりの幅があり、たとえ心理学について予備知識がなくても課題意識をもって望む学生と一般的な興味関心というレベルで授業へ参加する学生との大きく 2 つの層があることがわかった。授業者は講義等に当たって、このことを強く認識していなければならないことは明らかである。

今回の調査でも「19 心理学に以前から興味関心があった」という理由の中には「高校時代から心理学に関心を持っていた」「高校ではなかった授業科目なので」と具体的に述べている者がいた。今後、高校生への心理学教育の可能性と大学における教養教育での心理学教育のあり方を考える必要がある。

(2) 心理学教育における単純動機群の位置づけ

すでに述べたように、本調査の結果だけから結論めいたことを導くことはできないが、最近心理学関連の授業科目への受講者が増加していることが指摘される。これについても潜在的な受講希望者をも含めた実態調査が必要であることはいままでもない。心理学関係の科目ではすでに受講者数の制限を実施している授業者もおり、受講の希望はあっても

興味関心の強さ如何ではあきらめが先行してしまったりして正確な需要実態がとらえられていない。

またさらに、受講生の受講しての満足感如何によってはせっかくの興味関心や受講意欲にも影響が及び、ひいては需要状況を不安定なものにし、予測不能な状況を招きかねない。

今日、心理学への関心が強まり、また期待が高まっているとすれば、そのこと事態は心理学を専門とする者にとってこれほどうれしいことはない。心理学を専門とする者はすべてそうした人々によって支えられていることを認識すべきであるし、心理学が必ずや人々の幸福に寄与する学問であることをあらためて確信してよいのである。

そうした立場から、前節で述べた「単純動機群」と「目的動機群」に心理学教育の担当者はどう対応すべきかという課題に対し、今回の調査結果から得られるいくつかの示唆について述べておこう。

まず、受講生の中に「単純動機群」が存在し、彼らは特に明確な学習目的を持たないまま、しかし、にもかかわらず本授業を受講しようとしたわけである。ではそうした動機は何によって動機づけられたのであろうか。ここに今日の心理学関係授業への受講希望者増加の要因が隠されているはずである。

そこで、今回の調査結果をもう少し注意深く吟味することとした。まず、単純動機群の選択理由の大カテゴリー「10 一般的興味関心」と「20 単純な動機による選択」についてその下位項目に注目してみると「22 シラバスを読んで」が12名いるが21『『日常生活の心理学』というタイトルに魅力』が44名と圧倒的に多く、本授業を選択したきっかけがこのタイトルにあったことが明らかである。また「10 一般的興味関心」の下位カテゴリーの中では「19 『心理学』に以前から興味関心があった」が群を抜いており、さらにその内容は「高校生時代から」とか「高校までそうした科目がなかったの」と述べる者もいた。

また目的動機群のカテゴリーの中でも、「31 自分自身の人生」「43 他者の行動への関心・理解」「41 人間関係の難しさ」などの頻数割合が高い。これらはいずれも自分自身の日常生活での体験がき

っかけになっていることを示している。

こうした点から、単純動機群といえどもその動機は彼らが生活している日常の体験に発していることがわかる。そして今日の心理学への期待が人それぞれの私的な課題の解決に心理学が何らかの貢献をしてくれるのではないかというところにあることが感じられるのである。

こうしたいわゆる学問への日常生活からの期待は大いに尊重されなければならないことである。学問の本質が知識の体系化にあることは今後も変わらないであろう。しかし他方で、学問の民主化は学問への大衆の期待から生まれる。そしてこれに対応するのは「学問の実践」である。

大学が学問の府であることを忘れてくはないが、今日その出発は現に存在する多くの単純動機群の学生の中にあることを期待したい。彼らこそ実践からたたき上げた人類に幸福をもたらす本当の学問を構築する学徒となる可能性を秘めているからである。そして、こうした学生たちに授業者がどう対応するかが今後ますます大衆化するであろうこれからの大学の一つの重要な鍵となることを確信する。

5 おわりに

本報告はすでに冒頭で述べたごとく、調査結果の一部のしかも単純集計の結果のみを使ったもので、研究としては途上にあるものである。自由記述されたものを科学的に分析することの難しさへの挑戦としても不十分であることはいうまでもない。授業者の授業が受講者の期待にどう応えたかの結果の吟味も必要である。関心を同じくする同学の先達諸兄の業績調査もせぜにだ実施したことのみの報告に終わったことをお詫びする。諸兄のご示唆を仰ぎたい。

[使用ソフト]

- 1 文書作成ソフト「一太郎 ver.11」(株)ジャストシステム 2001
- 2 文書型データベース・ソフト「知子の情報 Pro.」(株)テグレット技術開発 1999
- 3 表計算ソフト「マイクロソフト・エクセル」マイクロソフト社 2001
- 4 音声認識ソフト「ViaVoice ProV8」IBM 2000